

時代劇の課題と転換点を考える

荒田正信

私は、十代半ばから中世〜近世日本の政治や経済、農業を中心とした産業の変遷、下克上による支配層の混乱、そうした中でも花開く文化など、この時代の歴史を書籍による学びやTV・インターネットによる調べ、現地に赴いての確かめで興味関心を高めてきた。

NHK大河ドラマや民間放送が年末年始に企画する時代劇は欠かさずに視聴、同様の映画も可能な範囲で鑑賞してきた。

私は、こうした作品が放映される時間帯や上映される期間は外すことなく視聴、鑑賞していた。しかし、積み重ねてきた知識や自分自身が歩んで身に着けた生き様とは全く相いれない映像に幻滅するようになった。近年、時代劇は衰退期にあるといわれ、長寿番組も相次いで消える状況にある。なぜだろうか考えてみたい。

私は、時代劇を視聴、鑑賞する観点として、三つのポイントを意識している。

第一 作品を通して何を訴えようとしているかを考える。スポットを何に当てているのか、的確に捉えたい。

例えば、徳川幕府五代將軍綱吉が発した「生類憐みの令」は、当初、生きるもの全ての「命」を育む善政とされたが、幕府の想いは中途半端に終わったことで施政は否定され、三百年以上経った今日では、TVや映画でも悪法として取り扱われているのは周知の通りだ。

一方、徳川幕府三代將軍家光の鎖国の令は、禁を破る「抜け荷」は断罪に処すという姿勢をどの制作スタッフも貫いて「罪は罪」とした作風を変えていない。

私は、こうした場面の設定や構成は安易で短絡的でつまらないものになっていると考えている。作品の制作が大胆に工夫され、為政者が大上段に振りかぶり「抜け荷につき断罪を申し付ける。」という様は、ひと工夫により終わりにしようではないか。

昔から、法は「民を罰するためではなく、民を守るためにある。」ものだという。「命」を守るための施策に誤りが生じたり、宗教やインフレという外敵からこの国を守るための「鎖国」だったと考えれば、前者も後者も同じスタンスで制作スタッフが関わるのが肝要だろう。

第二 人物相関（ヒューマンリレーション＝人間関係）がどのように描かれているかに注目する。義理と人情、支配層に多い血脈による統制や下克上による戦乱、経済や宗教がどのように描かれているかということにも着目したい。

人物相関で「人たらし」豊臣秀吉について考えてみよう。多くの俳優が秀吉を演じ、演出や脚本にも多くの方が関わった。そこで思うこと、最近の秀吉のイメージ作りはあまりにもひどい。

秀吉「人たらし」の所以は、次の通りだ。

昔、諸葛亮孔明、今にして竹中半兵衛重治と称された軍師が「秀吉様ならば」と三顧の礼に応えたという。

中国地方を領有する毛利家の外交僧、安国寺惠瓊は「羽柴筑前守なかなかの者にて候」という件からしても相当の人物と考えるべきだろう。

美濃攻略の足掛かりのため、調略により味方に組み入れ、命の保証を担保した大澤某のことを主君信長に「殺せ」と命じられながらも、大澤某に「木下藤吉郎が貴殿にうそを言ったことになる。わしを殺してくれ」と言つて命を張った。そのことにより主君信長と大澤某のゆるぎない信頼を勝ち取ったのだ。

近年演じられた秀吉像は、醜く稚拙でただのお喋り、女好きのおごり高ぶる男としか思えない印象だ。時代劇を嫌いになる一因になってはいないかと案じている。

本来、時代劇は、正義が悪を成敗するのが定番だったが、近年、権威・権力を盾に相手を黙らせる構図が定着したように思う。挙句、権力者が折檻の上、政敵や弱者を切り殺すようなことすべてが解決したように誤解を与えている。昨今の政治にも似た事象がみられるのは気のせいか「国で何も言わないので」「指示がないので」とトップダウン以外の解決の方法がないのだという言い回しが物語る事象だ。

韓国の時代劇を観て感じたことを述べよう。

王が「これから戦が始まる。武器や兵糧の準備はよいか。」と問えば、担当者が「国の財政は困窮極まっています。戦争は無理です。」という会話がある。他にも、経済担当者は「実りが少なかったので自国で兵糧を賄えませぬ。他国との交易で補います。」と述べ、鍛冶屋の親方は、武器や農具をどのぐらいの人数と期間で準備することができるか見通しを示す。

王は「大変なときだが、この至難を乗り越えないと大業は叶わない。力を合わせ頑張ろう。」といい、鍛冶屋の親方には「苦勞を掛ける」と労うのだ。ここに我が国の時代

劇との違いが垣間見える。食のこと、薬剤のこと、水のこと、武器のこと、農具のこと等が語られた番組は我が国では制作されない。

第三 時代考証は、正確であることが絶対条件だとは思わないが、甚だしい時代の錯誤がないか、視点が支配階層中心となっていないか、そんな観点で作品を観たい。

我が国の視聴者は、武士の頂点にでも立っているような錯覚に陥っていないか。武士の数はほんの少しだったということを確認しているだろうか。

商人は、金持ちで振る舞いがふてぶてしく「越後屋、お前も悪じやのう」と代官に言わせる映像を毎週見るのは決して気分がよくないことだった。全国を周って退治した悪人の数はどれぐらいあったのだろうか。下級役人は全て悪の手先として一言も発することなく切り捨てられるからたまらない。

最も国の礎となる農民は、学なく、才なく、汚く、何もできない者だという設定は、だれが考えたことか知らないが赤面の至りである。怯えながらの生活、農作業も力なくただらだらしていて笑顔も覇気も見られない。終いには、切られて番組構成上の引き立て役になるだけだ。勘弁だと言いたい。大名には、一人たりとも悪に加担した者がなかったという設定、納得がいかなかったのは私だけだろうか。

生活の中に存在するような時代劇の本質は、今、転換点にあるという思いで課題を提起した。